

人口問題と私たちが直面する課題 5

人口転換理論の再検討



1. なぜ出生率は置き換え水準を下回って減り続けるのか

前号で、出生は「行為」の結果であり、出生転換を考える場合には「行為」を考えなければならないという視点をご紹介しました。この考え方に基づくと、実は重大な結果が生まれてきます。今回はこの「行為と出生」の関係を少し詳しく分析します。

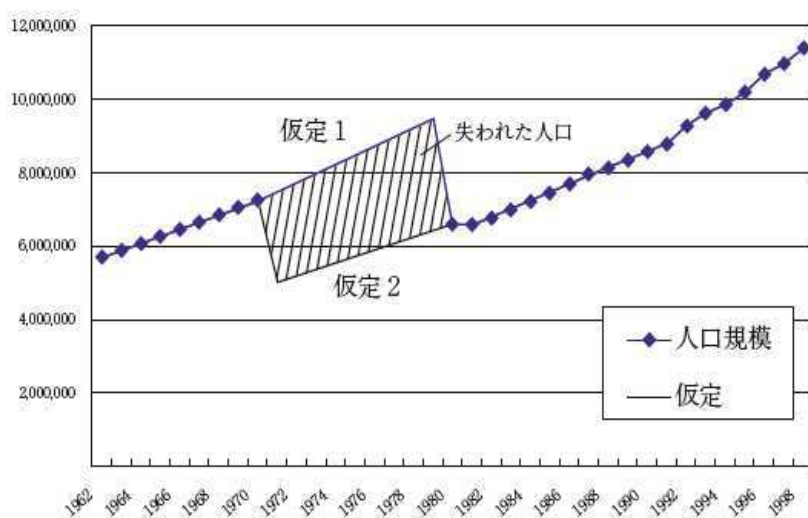
人口構造の変動は、これまでどちらかといえば機械的に捉えられることが多く、いずれ均衡するというホメオスタシスのような自動的な調整機能を前提としていたように思えます。実際、人間社会も地球環境に適応しなければ存在し得ません。適応できなければ減びるだけ、ということはつまり、環境の変化に対応した調整が行われてきたと考えることができます。

以前に、人類の「出アフリカ」から紀元ゼロ年までの平均人口増加率は0.02%程度で、近代の数%という人口増加率に比べれば100分の1のレベルのわずかな変動であったことをご紹介しました。しかし微視的に見れば、おそらく食料が潤沢にある間は急速に人口が増加し、その後、天災や飢饉、疫病などによる激減を繰り返したと考えられます。結果として、停止状態に近い人口増加というのは、非常に長期的な視点の話で、短期的にはそうではなかったのです。

一見ホメオスタシスのように見える「適応」も同じでしょう。結果として適応しているように見えても、それは「適応した」のか、それとも適応できなかった人類は既に死滅しており、結果として生き残った人類だけを考えているから「適応と見える」のか、よくわかりません。適応と言ってしまうと分かったような気になりますが、実はそのメカニズムに対する関心を失い、ブラックボックスに入れてしまうような傾向があると思います。

いずれにしても、私たちが政策的な対処を含め、出生転換について考える場合、人間の一生程度の時間幅で問題を考えるのですから、自然の均衡やホメオスタシスという考え方を使うわけにはいかないのです。

カンボジア—失われた人口



そこで「行為」として出生を考える必要が出てきます。この結果は驚くべきものです。つまり、集団としてみた場合、その出生力はハテライト指数¹=TFR10前後から0まで任意の値を取りうるのです。いくらなんでも0はないだろうという反論もあるかもしれませんが。しかしカンボジアのポルポト政権後期には、出生

率そのものが非常に少なくなったと考えられる傍証があります。家族計画の機材もまったく入らない中で、出生が殆どなくなってしまったと考えられるのです(上図参照)。

もちろんポルポトによる虐殺や開発事業の失敗による餓死の影響もありますが、おそらくカンボジアの人びとが将来に希望を持ってなくなっていたことを示していると思われます。もしそうでなければ、カンボジアで同時期、人口の1/2弱から1/3強の人口が増加できなかった理由を説明できないと思います。これと同様の例は、旧ソ連諸国が独立した際における、急激な出生率の低下にも見ることができます。

¹ 自然状態で一切の避妊を行わなかった場合の完結出生力（夫婦の最終的な出生子ども数）

2. 「行為」ってなあに？

では、ここで言う「行為」とは何でしょう？社会学の研究は行為を対象としていますが、これは簡単に言えば、「意味を持った行動」と定義することができます。例えば、腱反射を確認するために膝を打診して跳ね上がる現象がありますが、これは身体の機能としての「反射」であって、本人の意思が反映されたものではありません。よって行動ではありますが「行為」ではありません。また、

「意味を持った行動」が「行為」であることから、行動の一部が「行為」であると考えられますが、何らかの意味を持って「行動しないこと」も「行為」なので話は単純ではありません。

そこで問題です。私たちが最も頻繁に行っている代表的な「行為」は何でしょう？改まって聞かれると難しいですね。答えを言いますと、一般的に「発話行為」、つまり「喋る」ということです。実際には一方的に喋っているわけではないので、「聞く」という行為がセットになりますし、身体的なゼスチャーなどを把握する、いわゆるボディランゲージというものもそこに加わり、五感のほとんどが関わった行為の相互作用がそこで起こっています。これを「コミュニケーション的行為」なんていったりします。

喋るという行為は、行動としてみたら気道から声帯に空気が送り込まれ、声帯が振動し、音として出ている状態です。しかしその音が意思を伝えるためには、この音が相手に理解できる、パターンや組み合わせを持っている必要があります。つまり、喋っている人がそれを伝えたい人と同じ情報を共有していることが前提となるのです。これが違えば伝わりません。

例えば私の場合、ジャンボ！という言葉がスワヒリ語の挨拶であることは知っていますが、それ以上は知りません。ケニアのマサイ族がスワヒリ語で話しかけてくれても「何か言っているな」という以上の理解をすることはできないのです。つまり、発話行為が成立するためには、お互いに同じ情報を共有していなければならないのです。

そこで、出生が「行為」であり、意味のある行動であるのなら、人々の意識を変えればいいんだな、と思うかもしれません。しかし、「行為」は意味を持った行動であると言いましたが、それが「行為」をしている人間にとって十分意識できるかどうかは別問題なのです。

では質問です。何かする時、常に考えて行動していますか？「あたりまえだろう」と怒られそうですですが、私の場合、普段の生活ではあまり考えないで行動することも多いように思います。「考えて」という言葉は曖昧なので、「意識して」と置き換えてみると良いと思います。

自分がそうだから、というわけでもないのですが、私たちの行為はほとんどの場合意識的になされていないのではないかと考えています。例えば、言葉を喋るとき、日本人は日本語で話していますが、日本語の文法を意識して話すことは稀ではないでしょうか。逆に外国語を話す場合には、文法を考えているうちに、話すタイミングを失うこともよくあります。

ここで分かることは、実は意識していると上手く行為ができないというパラドックスなのです。もちろん、私たちは日本語の文法を知っているからこそ喋れているのですが、文法を知っていることと、それを意識していることは違います。知っているけれど意識していないものを説明するには、国語学者などの専門家の手を借りるしかありません。

私たちの行為も同じで、意識しない行為のほうが多く、意識している行為のほうが限定的ではないかと思うのです。このように説明すると、分かった、“無意識に突き動かされて行為しているんだね！”という言葉が聞こえてきそうですが、フロイトが提示した、「無意識」はまた特別な意味を持っているのでここでは使いません。行為には、「意識した行為」と「意識しない行為」があると理解してください。

意識しなくでもその行為ができるようになるには、さまざまな知識を学ぶことが必要です。むしろ非常に深く学んでいるからこそ意識することがなくなったともいえます。その意味で意識しない行為は、社会的知識が身体化した、内在化した、意識化の知識になったものといえると思います。私たちの行為のほとんどはこの意識しない行為によって成り立っているといえすぎでしょうか。

出生を「行為」の結果と考えましたが、通常そのことが意識されない理由もお分かりですよ。私たちの日々の生活のほとんどは、あたりまえだとして意識されない「行為」で構成されていて、だからこそ私たちは同じことを繰り返すことができます。出生も同じです。妊娠してしまえば、通常の場合であれば、後は生物としてのメカニズムで出生に至ります。したがって、社会的価値観や慣習などで規定された行為が影響するのは妊娠までのプロセスです。

そこには恋愛や見合い、結婚などさまざまな社会制度が複雑にからみあったプロセスを経ることになりますが、そのほとんどが、伝統的価値観や慣習など人々の日々の生活としての行為やそれを支える価値規範によって運営されていて、それらの是非を問うことは余りありません。

これらの人間の行為の特色から、社会的な条件の変化に対し、その対応は遅れがちになります。特に識字率が低い伝統的社会では、この内在化された行為の比率が高いと考えられるので、行為の変化につながるまでに時間がかかります。これが、死亡率が低減してもなかなか出生率が低下しない理由であり、さらに出生率を下げるためには、女性の、特に子どもを産む前の若い女性の識字率を上げることが必要であると考えられます。

この分析に従えば、多産であれ少子であれ、行為を変化させるためには「意識されていない行為の部分意識化すること」と「意識しない行為を支えている環境（条件）を変化させること」の両方が必要だということになります。

少子化は、多くの場合、国民の識字率が高く、環境（条件）変化に敏感に反応している先進国で生じています。つまり近代化された社会です。近代化の特色は、M. ウェーバーの指摘を待つまでもなく、「計算可能性と合理化」であるといえます。このような状況の中で、比較的近視眼的な経済合理性を内在化し、人々は意識しないで近代合理的な反応を取ろうとしているのです。

言葉を代えれば、個人の利益の集合が社会の利益につながっていない状態が生み出されているといえ、少子化とは、子どもを持つことのメリットがあまりなく、さらに子供を持たないことのデメリットもあまりない状態といえます。そしてこれは、近代社会における合理的な選択としての個人の価値観を反映させたものであり、短期的に解消されるものではないでしょう。

出生が行為である以上、先進国で出生を上げるためには、女性にとって出生が負担にならないよう、子どもを生むことが合理的な判断となるよう、その条件をそろえることが重要になります。この論点から言えば、少子化への対応は明確かもしれません。個人が近代合理的に行なった結果、少子化に至っているのですから、子どもを持つことが制度的にも経済的にも負担ではなく、利益になるという社会制度を作り上げればよいということになります。

具体的には、例えば育児が負担にならない、さらに言えば子どもを持つことが女性にとってメリットとなるような制度構築を行うことが必要になるということです。このような制度は大きな社会変革を必要とします。

行為としての出生を説明するのに少し長くなりすぎました。「人口問題は増加を抑制する問題なのか、それとも少子化を改善する課題なのか」という問題に対する解答は次号に譲らせていただきます。

(楠本 修)